



雪崩の知識を共有し、雪国の暮らしを守る

特定非営利活動法人 なだれ防災技術フォーラム



雪崩防災技術の整備や普及、技術者支援などの事業を通して、国内関連分野の発展に寄与するために設立された団体です。日本の風土や雪質に適した技術の提案や、設計・設置基準の統一、技術者の育成支援や知識の継承などに取り組んでいます。持続可能で、災害に強いインフラやまちづくりに関する取り組みを通して、経済成長と人々の健康で安全な暮らしにも貢献しています。



新しい循環型の農業技術で持続可能な社会を実現

株式会社 プラントフォーム



陸上養殖と水耕栽培を同時に行う、アクアポニックスという新しい循環型の農業技術を活用して、今までにない食農連携モデルの実現を目指しています。環境に配慮したクリーンな技術を農業に活かすことにより、水資源の利用効率向上と持続可能な食糧生産が可能になります。この技術を広めることで、安心安全かつ新鮮な野菜が手ごろな価格で並ぶ社会をつくっていききたいです。

市民活動・虎の巻

/// 研究テーマ /// 会計の基礎 ～計画の評価(決算)から改善～

1年間の帳簿の集計や次年度の計画を考える時期になりました。

前月に続き、今月号では会計業務のPDCAサイクルのCHECK(評価)→ACTION(改善)についてご紹介します！

3

評価 CHECK

計画を評価する【CHECK】

日々の帳簿付けをもとに、計画(予算)の振り返りをしましょう。計画よりも収入が少なかった、支出が多かったなど、なぜ予定通りにいかなかったのかを見直します。ここの振り返りが次年度に向けて大事な作業です。

4

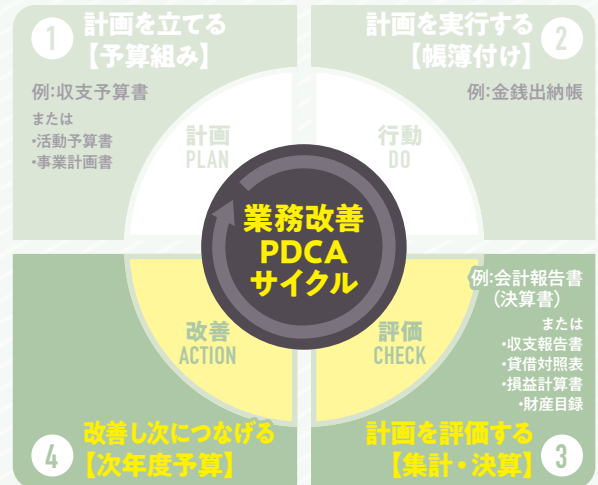
改善 ACTION

改善して次につなげる【次年度予算】

③の評価をもとに、次年度の予算を考えていきましょう。無理のない計画づくりが大切です。全体の予算を立てるために、事業ごとの予算をざっくり考えておくと、あとから「あれ?足りない…」という事態にならずに済みます。

MEMO

2月号ではACTION(改善)～PLAN(計画)に役立つ
資金調達についてご紹介します！



知っているようで知らない分別の「先」を見てみよう



特集

株式会社 丸共／金内 宏彰さん
長岡市環境部環境業務課／山本 祐子さん

NAGAOKA PLAYERS

上村 光一さん

長岡みんなのSDGs

特定非営利活動法人 なだれ防災技術フォーラム
株式会社 プラントフォーム

市民活動・虎の巻

会計の基礎 ～計画の評価(決算)から改善～

センターからのお知らせ

活動紹介・作品展示におススメ！

協働センターの壁面展示

協働センターのロビーには無料で利用できる非営利団体の活動発表用の展示スペースがあります。使い方はいろいろ！展示用備品のレンタルもできます。サークルの作品展示や、活動紹介などにいかがですか？

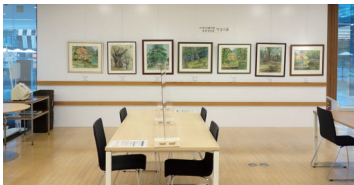
展示期間 2週間以内

利用申込 協働センター窓口または
電話でお申込みください

※展示予定日の6カ月前より予約受付 ※個人の利用はできません

展示スペース

- 正面壁：幅5m80cm×高さ1m70cm
- BCホール協壁：幅6m×高さ1m75cm
- 協働ルーム協壁：幅6m50cm×高さ2m50cm
- 第3協働ルームガラス面

2022.1.1
vol.109

TAKE FREE

発行／
ながおか市民協働センター〒940-0062 長岡市大手通1丁目4番地10 シティホールプラザアオーレ長岡 西棟3F
Tel.0258-39-2020 Fax.0258-39-2900 Mail.kyodo-c@ao-re.jp URL.https://nkyod.org

配布場所

長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、
市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。つながる
ラジオFMながおか80.7MHz
毎週月曜17時頃～

「NAGAOKA PLAYERS」と「長岡みんなのSDGs」を放送中！



@NkyodoCenter



@nagaoka_kyodo



@nagaoka_kyodoc

市民活動の
ポータルサイト
コライト

ながおか市民協働センター

「混ぜれば『ごみ』、分ければ『資源』」 日頃の小さなアクションを大切にしよう

らこって編集部が長岡市を縦横無尽に駆け回って見つけた、協働や市民活動に関する話題をお届け！

今回のテーマは「混ぜれば『ごみ』、分ければ『資源』」。

分別されたごみのその先を知ったら、普段何気なくしている分別の大切さが見えてきました。



ひろ あき
金内 宏彰さん

ごみのリサイクル事業を展開する株式会社丸共に勤務。プライベートでは、月に1度早朝にごみ拾いを行っている市民活動団体「Picking Up Mind」の活動にも参加。公私両方で、ごみ問題に関わる。



山本 祐子さん

2016年4月から環境業務課に在籍。ごみと資源物の収集運搬業務を担当。最近のマイブームは食品ロス削減。野菜の皮の活用法やリメイク料理など、無理をしなくて楽しく続けられる取り組みを模索している。



金内さんと山本さんをゲストにお迎えしたイベント中の様子。参加者からは、分別に関する疑問や株式会社丸共の事業内容について質問が寄せられました。

2020年度に長岡市で出たごみと資源物の総量は、85,277トン^{*1}。市民一人当たり一日に878グラムのごみを出している計算です。私たちが日頃ごみとして捨てている物は、素材や種類ごとに分けずに捨ててしまうと「ごみ」として燃やされたり、埋め立てられたりしてしまいますが、きちんと分別することで様々な「資源」に生まれ変わります。今回は、ごみのリサイクル事業を展開する株式会社丸共の金内宏彰さんと長岡市環境部環境業務課の山本祐子さんに、ごみのリサイクルについてお話を伺いました。

生ごみで発電！?

もともと「生ごみ」は、燃やすごみとして処分されていましたが、長岡市では2013年から「燃やすごみ」と「生ごみ」を分けて回収するようになりました。理由は、燃やすごみの削減と資源の有効利用のため。「生ごみ」を資源とするのは、自治体の施設としては全国最大規模の「生ごみバイオガス発電エンター」。生ごみを発酵させて出たバイオガスを発電に利用しています。この取り組みにより燃やすごみの焼却量が2割減り、CO2排出量の削減にもつながっているそうです。また、埋め立てる焼却灰が減ったことによる最終処分場の延命化や焼却場の統廃合により、ごみ処理にかかるコストも抑えられています。

廃棄家電は都市鉱山！?

廃棄される携帯電話や家電に使われている様々な金属資源は「都市鉱山」とも呼ばれ、2021年に行われた東京オリンピックのメダルが、それらで作られたことが話題になりました。(株)丸共では、回収した家電を500円玉程の大きさに粉碎し、中に含まれている鉄やアルミニウムなどの金属を取り出してリサイクルしているそうです。

枝葉でバジル栽培！?

枝葉ごみは分別して捨てることで有効活用されます。(株)丸共の子会社・(株)クリーンリードでは、なんと枝葉を熱源として発電を行い、バジルの水耕栽培のための電力として使用。ごみを活用した地球にやさしい発電だけではなく、豪雪や気候変動時における安定的な作物の生産や、新産業による地域振興にもつながっています。枝葉をごみに出す際には、リサイクルしやすいように草や落ち葉の土をしっかりと落とし、枝葉・草以外のものを混ぜないようにすることが大切です。



株式会社クリーンリードで育てられているバジル。県外に出荷されている他、長岡市内のレストランでも味わうことができます。

プラスチックがごみ袋やハンガーに！?

日本は1人あたりのプラスチックごみの量が、世界で2番目^{*2}に多い国。プラスチックごみには、焼却する際にCO2が排出されること、埋め立てられると自然に分解されず地中に残り続けることなど様々な問題が。廃プラスチックのうち、食品トレーやジャンプーのボトルなどの容器包装材に使われているプラスチック(♻️マークのついているもの)は、ごみ袋やハンガーにリサイクルされます。リサイクルの工程をスムーズに進めるためには、♻️マークのついているものについていないものをきちんと分けること、汚れている場合は水で洗ってからごみに出すことが大切です。



長岡市寿にある「生ごみバイオガス発電センター」。生ごみを処理する際に出る発酵残さや排水を処理する施設が近くにあり、運搬にかかるCO2削減にも配慮しています。

私たちにできること

普段何気なくしているごみの分別ですが、分別した先でごみを資源として活かそうとしているさまざまな人の存在を知ると、その重要性を再確認できますね。私たちにできることを積み重ねていけば、焼却する際に発生するCO2による地球温暖化防止や、最終処分場の不足などのごみ問題解決につながるだけでなく、SDGs(持続可能な開発目標)の達成にも近づくことができます。日常生活の中でできる小さなアクションを大切にしていきたいですね。

^{※1} 長岡市環境部環境業務課「長岡市ごみ情報誌 vol.46」より

^{※2} 国連環境計画「Single-use Plastics: A roadmap for Sustainability」(2018年出版)より

市民の声



星野さん

十数品目に分かれている長岡市のごみ分別が全国的に先進的であることを知り、驚いた。身近なごみ問題について多くの学びがあった。



伊部さん

分別の裏側にある企業や行政の努力を知れてよかった。日常の行動がSDGs達成につながっていくと思うので、頑張らなくてもできることを発信していきたい。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



ウワサのあの人にインタビュー！

NAGAOKA PLAYERS

私たちの地域は私たちが守る
困ったときに助け合えるつながりづくり



上村 光一さん(64歳)
主夫／東川口地区自主防災会

1957年長岡市川口生まれ。就職後は県内外で暮らしていたが、中越地震を機に2005年に川口へリターン。防災の他にも木沢陶芸の会など様々な形で地域に関わっている。

平常時の防災活動や災害時の助け合いに取り組む自主防災会。上村光一さんは「東川口地区自主防災会」で、自分たちで工夫した防災訓練の企画運営など、地域の安心安全な暮らしにつながる防災活動をしています。上村さんが会に関わり始めた2014年の防災訓練は、点呼して集まった人を確認するだけのものだったそうです。「やらされている感が強く、本当にこれで良いのかとモヤモヤした気持ちを抱きました」。

そこで、まずは地域課題を知るために、区長や防災委員で各災害の発生確率と被害の大きさのリスク分布図を作成。すると、地震より水害のリスクが高い地域だったことがわかりました。浮き彫りになった課題を地域住民にも考えてもらうために、子どもでも楽しめる「防災クイズ」や災害時に自分のとるべき行動が整理できるオリジナル避難計画の「マイタイムライン」の作成を防災訓練の中に取り入れたそうです。「誰かに言われて動くのではなく、自分たちで地域の問題や課題を抽出したことで自分ごとに落とし込みました。また、訓練を地震から水害を想定したものに變更し、地域課題に合わせるように企画しました」。

2020年には、新型コロナウイルス禍での防災訓練として、住民が集まらなくてもできる「堤防の高さ表示」を製作(写真)。人目につきやすい場所に設置するために川口町商工会や地域住民に協力を依頼。翌年には、地域の人から親しみをもってもらえるように堤防表示に東川口保育園の子どもたちからイラストを描いてもらいました。「育まれてきた防災の意識を絶やさないために、形を変えてでも続けてきました」。

上村さんが活動してきてうれしかったことは、地域全体の防災意識が高くなり住民からの協力が得やすくなったこと。行政や地域の団体からも声がかかり、事例紹介をする機会も増えたそうです。「活動が続けてきたことで平常時のネットワークづくりの成果を実感しています。今後は活動がマンネリ化しないように次々と新しいことを考えていきたいです」。私たちの地域は私たちが守る。育まれてきた防災の意識がこれからも人と人をつなげていきます。

